

語り継がれる巨匠への道を、一途に向かう レイフ・オヴェ・アンズネス

ロンドン公演レポート&インタビュー 後藤菜穂子(音楽ライター/ロンドン在住)

3年半に及んだベートーヴェン・ジャーニープロジェクトでは一人の作曲家の世界に専念したレイフ・オヴェ・アンズネスだが、昨年秋よりふたたびラエティに富んだレパートリーでのリサイタルを再開している。この夏は母国ノルウェーでローゼンダール室内楽フェスティバルという新しい音楽祭を立ち上げ、またオリンピックで話題のリオ・デ・ジャネイロをはじめとする南米でのリサイタル・ツアーも行なうなど、ますます充実した活動ぶりを見せている。

筆者は先日、ロンドンでのリサイタル(9月19日)を拝聴し、それに先だつて11月の日本公演のプログラムについてお話をうかがった。

シュベルトの「3つのピアノ曲 D946」は、アンズネスにとって新しいレパートリーだという。この夏のローゼンダール室内楽フェスティバルではシュベルトの最後の年1828年をテーマにしたそうだが、これも最後の年の作品だ。

「後期三大ピアノ・ソナタの影に隠れがちですが、驚くべき名作です。シュベルトのエッセンスが凝縮され、しかも多様な世界が描かれています」と語る。アンズネスはかねてよりバリトン歌手のマティアス・ゲルネとコンビを組んでおり、歌曲を通してシュベルトの音楽の理解を深めている。

さて今シーズン、アンズネスが特に力を入れているのはシベリウスのピアノ曲とショパンの4曲のバラードで、どちらも近々レコーディングの予定だという。「シベリウスのピアノ音楽は祖国フィンランドでさえほんの一握りの作品しか知られていません



そのうち40%ぐらいはすばらしい作品です。彼はピアノ奏者ではなかったのですが、ピアノスティックでない表現もあるのですが、彼のオーケストラ作品の色彩感を想像しながら演奏すればその魅力を引き出すことができます。シベリウスは、曲の雰囲気をつかむ能力に長け、その音楽にはどこかしみじみとした味わいがあります。リサイタル後半は、ドビュッシーの《版画》とショパンの《バラード》第2、4番と《ノクターン》第4番(OP.15)で構成される。『ドビュッシーやショパンの音楽はきわめてピアノスティックで、鍵盤に手を置くだけでびつたりとはまる感覚です。《版画》はたしか17歳の時に初めて弾いたドビュッシー作品で、久しぶりに弾くのもとても新鮮です』

この後半の演目はロンドンでのリサイタルで聴いたが、アンズネスのドビュッシーはかなり淡い色彩で描かれ、表現も繊細かつ精緻だ。もつとシャープなタッチでくっきり弾く奏者もいる中で、彼はまるで過去を回想するかのように、しっとりとしたドビュッシーを聴かせた。そして締めくくりはショパンの

《バラード》第2、4番。今回アンズネスのショパンを聴いて感じたのは、彼がベートーヴェンの側からショパンにアプローチしているということだった。楽譜と真摯に向き合い、けつして勢いでは弾かず、ルバートも控えめであつさりした味わいの演奏ながら、曲の内的なドラマを鮮やかに浮かび上がらせる。実際、「ショパンの音楽は主観的でありながら古典的な点が特色だ」と思います。アンズネスは語る。

「私にとって4曲のバラードは、指揮者にとつてのフラームスの交響曲のような大きな存在です。特にバラードは10代の頃から夢中でした。ショパンを弾くのは久しぶりですが、一つにはモダン・ピアノではショパンの繊細さを出すのが難しいと感じるからです。ショパンの音楽は想像以上に複雑に書かれているため響きのバランスに配慮が必要です。このようにどの作曲家とも謙虚に向き合い、その音楽を深く掘り下げていくアンズネス。颯爽とした青年の面影は今もあるが、静かに成熟を重ねている尊敬すべきアーティストである。

アンズネスに聞く

Q: この夏は、母国ノルウェーで新しい音楽祭を立ち上げたり、オリンピックで沸く南米でリサイタルツアーを行なったりと、夏休みを取る間もなかったのではないですか？

(A) アンズネス A: そんなことはないです。7月は夏休みを取って家族と過ごしました。8月

中旬に第二回目のローゼンダール室内楽フェスティバルを開催することができて、大きな喜びでした。今年はシュベルトの最後の年である1828年をテーマに選びましたが、音楽祭や録音でこのように一つのテーマや一人の作曲家を掘り下げていくのがとても好きです。

Q: 演奏旅行が多い中、どのようにオフの時間を作っているのでしょうか？

A: それは簡単です。家に帰れば家族が待っていますから「オフ」ではなくむしろ「オン」の時間というべきでしょう(笑)。今、上の娘が6歳で、双子が3歳です。たしかに「オフ」の時間はあまりないかもしれませんが、家族との日常は演奏家の人生とはまったく違って健全だと思います。

Q: 演奏旅行中の空き時間の過ごし方は？

A: そうですね、なるべく何か新しいことを体験しようとしています。観光する時間はあまり取れないのですが、25年間も演奏旅行していると、同じ都市、同じコンサートホールを訪れることが多いので、なるべく新しい土地にも行くようにしています。この夏は演奏旅行の合間にマチュピチュ遺跡を訪れることができて、今までにないような最高の体験をしました。

Q: 東京滞在中に必ずすることはありませんか？

A: 私は和食が大好きなので、滞在中に一回は名レストランで友人と特別な食事を楽しみたいです。これまでもすきやばし次郎やNARISAWAなどで極上の料理を味わいました。

Seen and Heard international
「世界最高峰のピアニストによる、
すばらしいリサイタル」

ロバート・ビーター

レイフ・オヴェ・アンスネスはおそらくどんな曲でも演奏できるのではないかと思われる、まれなピアニストの一人である。(中略)シベリウスの口短調の即興曲は、ハーブの演奏のようなきらびやかに輝く装飾音が音の流となって流れていく曲で、すっかり魅了された。タッチのコントロールと、この複雑な伴奏部分に対するメロディ部分の響かせ方が見事だった。(中略)リサイタルの後半はドビュッシーの『版画』で始まった。『塔』ではジャワのガムラン音楽の世界が呼び起こされ、テクスチャと響きのコントロールは見事で、音の重ね方はお手本のようなだった。繊細で美しく段階的に調整された演奏で、音楽が自ら語りかけてくるように思えた。『グラナダの夕べ』では、うだるようなグラナダの暑さが強烈に思い起こされ、アンスネスが示した色彩の変化のいくつかは実に豪華だった。『雨の庭』ではすばやいトッカータの修飾音が機敏に



演奏され、パッセージワーク(副次的な部分)は尋常でないほど明瞭にくっきりと浮かび上がった。彼がスタインウェイから引き出した燃え上がるような音色と、光と影のゲームが私は好きだ。

リサイタルの終わりはショパンの有名な3作品だった。アンスネスはバラード第2番で全体を明快な語り口で演奏し、穏やかなオーブニングから、乱気流にのみ込まれたようなプレスト・コン・フオーコの部分への雰囲気の変化にもうまく対応していた。ノクターン第4番ではベルカント風のメロディを磨きのかかった豊かな音色で、さらに装飾的な箇所の一部では奇抜な雰囲気を出して演奏した。バラード第4番の演奏は、この傑作をどう演奏するかを示すマスタークラスのように、豊かな色彩、創意あふれるテクスチャ、各セクションが組織的かつ自然に浮かび上がってくる複雑な対位法でいっばいの、壮麗な音楽の詩を思わせた。

全体的に見て、これは世界最高峰のピアニストのひとりによる、すばらしいリサイタルだった。

※インタヴュー、新聞批評全文は、ジャパン・アーツホームページをご覧ください。

レイフ・オヴェ・アンスネスピアノ・リサイタル

2016年11月25日(金)
18時30分開場・19時開演
東京オペラシティコンサートホール

料金: S ¥9,100 A ¥7,500 B ¥5,900 C ¥4,800

ジャパン・アーツ夢倶楽部会員料金: S ¥8,200 A ¥6,800 B ¥5,300 C ¥4,300 ※料金はすべて税込です。

■その他の日本公演日程

日程	ホール	お問合せ
11/19 (土) 18:00	デーヴィッド・ジンマン指揮 NHK交響楽団 定期演奏会	N響ガイド 03-5793-8161
11/20 (日) 15:00	NHKホール[シューマン:ピアノ協奏曲 イ短調 作品54]	
11/22 (火) 19:00	電気文化会館	電気文化会館052-204-1133
11/23 (水・祝) 15:00	所沢文化センターミュージ	ミュージケットカウンター 04-2998-7777
11/26 (土) 14:00	兵庫県立芸術文化センター	芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255

全曲決定!

シューベルト: 3つのピアノ曲 (即興曲) D.946

シベリウス:

即興曲 第5番 口短調

3つのソナチネ 第1番 嬰へ短調 Op.67

2つのロンディーノ 第2番 嬰へ短調 Op.68

ロマンス 変ニ長調 Op.24-9

ドビュッシー:

版画 I.塔 II.グラナダの夕べ III.雨の庭

ショパン:

バラード 第2番 へ長調 Op.38

ノクターン 第4番 へ長調 Op.15-1

バラード 第4番 へ短調 Op.52

【お問合せ】 ジャパン・アーツぴあ 03-5774-3040 www.japanarts.co.jp